君初(そ)めし　鹿島若宮(かしまわかみや)　携(たず)からに
渡る蟹(かに)さへ　赤き頬(ほほ)

令和四年二月二十四日

大中臣正比呂

鹿島の若宮の社(やしろ)の前で君を見初めたのはいつの頃だっただろうか。嗚呼、あの蒸し蠣も幻であったに違いない。

桃ちゃんの節句はもうすぐだよ(幻想小説家クラブ謹呈)